昭和24年12月27日第3種郵便物認可

いつでもどこでも
日刊産業新聞DIGITAL
PC・スマホ・タブレットで産業新聞まるごと読める
まずは2週間の無料試読から
https://www.japanmetal.com/pre-order

発行所　産業新聞社
東京本社 東京都中央区新川1−16−14
TEL03(5566)8770㈹　FAX03(5566)8185
大阪本社 大阪市西区阿波座1−3−15
TEL06(7733)7001㈹　FAX06(7733)7070
アジア総局 上海市婁山関路85号 東方国際大厦C座1604室
上海支局 TEL86-21-6278-7750　FAX86-21-6278-7751

日刊 産業新聞
Japan Metal Bulletin

2020年（令和2年）
11月24日（火）
第20083号
Since1936

金属リサイクル 未来への展望

上場大手各社首脳座談会 4

SDGsで新しい価値観

「論語と算盤」の両輪が必要

高橋 克実氏
（イボキン社長）

吉野 佳秀氏
（ベステラ会長）

鈴木「中国は環境問題について本格的に取り組み始めている。数年前に彼らは欧州最大手のスクラップ業者を買収した。つまり高い処理技術を手にしたってこと。良い面悪い面あるが、国内循環を推進するのは歓迎すべきことだね。ちなみに現在の日本の鉄スクラップ輸出量は800万トンくらいだけど、これは段々減っていく。国内使用が増えるから。二酸化炭素を発生させないように、おそらく高炉メーカーも電炉を作って原料として鉄スクラップを使用することが始まる。基本的には日本で発生したものを日本で循環させていくのはわれらの商売としては望ましい」

高橋「日本は粗鋼生産量に占める電炉比率が25%、アメリカは70%、EUが40%ですよね。そのうち日本もEUくらいの水準は行くんじゃないでしょうか」

鈴木「同意。でもそのためには高級なものを作らないと。薄板とか。ということは原料を供給する側であるわれわれの品質管理が大変重要になってくる。同時に動脈産業と静脈産業の境がメルトダウンすると思っている。そうじゃないと循環しない。製造業にとってみれば一定量を常に確保できるようにしないといけないから、われわれも一定の規模になる必要がある。アメリカではニューコアが圧倒的な大手スクラップ業者だったDJJを吸収したでしょ。アメリカの大手スクラップ業者は、90年代まではみんな輸出業者だった。でもDJJは国内中心で、鉄鋼メーカーは電炉を作るときDJJにお伺いを立てたりして、電炉（消費者）に対して優位に立っていたんだけど、ニューコアに買収された。こういう変化がいずれ日本でも起きてもおかしくない」

鈴木「業界が発展するには相応の能力を持った人が多く必要。これまでは優秀な人がこの業界に目を向けなかった。今は違う。若い人たちがこの仕事に社会的価値があると思い始めた。昔、スクラップ屋の優秀なせがれは家を継がず、学者や医師になったり、大手企業に行ったりしていた。今は優秀な人が継ぐようになった。社会的価値・発展の余地があるとみているのだと思う。彼らにその能力を最大限発揮してもらうためにわれわれも何かしらの組織を作りたい。業界のベースは人だ」

吉野「いい会社にはいい人材がくる。10年後、この業界が社会の主役になっていかないといけない。環境保護に最も携わる業種なんだから。一つの環境問題をクリアすることに、大きくマーケットは広がり、産業は発展する。われわれも『SDGsなんて余計な面倒なことを』といった意識は捨て、新しい価値観を生み出したい」

佐野「SDGsはどうしてもいいことなんだけど、私は幕末の『ええじゃないか』に例えている。踊りの輪の中には入るべきだと思うけど、頭に血が上りすぎないようにビジネスとしてきちんと考える必要がある。そもそも社会課題を解決するのはわれわれの利益の根源だし、世界の持続可能性を追求することは会社の持続可能性を追求することだから『いまさら』という感じもある（笑）。それよりも10年後には、もっと技術のイノベーションがあってほしい。選別や化学的なアプローチで。そういうのをあまりわれわれの業界は持っていない。働く環境も良くしたい。ある家電リサイクル会社の工場にいったら、工場がとてもきれいで私の常識を変えてくれた。待遇のみならず物理的な働く環境を整備したいと思っている。わが社を含めて業界の労働環境をよくしたい。明確な理念のもと収益率・技術力・社会貢献度も上げるべき。魅力ある会社を自分で目指したいね」

高橋「ISOを知ったとき胸が躍って、これが会社・業界を変えてくれるんだと思ったのを今でも覚えている。SDGsを勉強した日も、あの時と同じような気持ちになった。『これほんとにいいな』と。SDGsはお題目とかきれい事じゃなく、そこに同化して、どこまで自分を投入できるかが大事だと思っている。若い人にはそれを訴えていきたい。最近こんなことがあった。来年当社に入社が決まった新卒の方は世界一周をして社会貢献活動を数多くした学生さんで、経営学部のゼミで『社会貢献活動と経済活動は両立できるか』という問題を扱ったらしい。社会貢献活動というとNPO団体が思いつくけど、企業から寄付をもらって活動しているところが多い。寄付なくして社会貢献活動はできるのか、と考えてうちを受けてくれたそうだ。『SDGsのほとんどの項目に最も合致しているのがリサイクル業界だ』と。そういう人を取り込んでいける業界にしたい。今、廃炉ビジネスに注目しているんだけど、SDGsに関心がある人は廃炉問題にもいろいろ考えがあると思うし、ロボットやIoTなど私たちが疎い分野に精通している人たちにも業界に来てもらいたい。渋沢栄一が『論語と算盤』を書いているけど、そういう両輪が必要だと思う」

鈴木「最後に一言。私は社会的に価値のあることを真剣にやる経営者が数多く出てくることで、社会のレベルが上がると思っているし、われわれもそういう自負を持ってやっている。この座談会に集まってくれた方々の姿勢はいい。非常にシンパシーを持った。当社のほうが見習わないといけないね（笑）」

（松井健人、早間大吾）

（おわり）

日刊産業新聞20・11・24